

ウフィツィ美術館の再生
La rinascita degli Uffizi

アレッサンドロ・チェッキ
Alessandro Cecchi
(フィレンツェ、ウフィツィ美術館、ルネサンス・マニエリスム絵画部長)

以下の文章は、1995年3月15日にイタリア文化会館にてアレッサンドロ・チェッキ氏が行った講演“La rinascita degli Uffizi”の翻訳である。講演の内容は、1993年5月にテロリストによる爆破事件のために甚大な被害を被ったフィレンツェのウフィツィ美術館 (figs.1,2) が、その後どのような努力の過程を経て、全面的再開に向かいつつあるかを叙述したものである。現在すでに、事件によって破損した建築および美術作品の修復作業は、最終段階に入っている。容易に想像されるように、この過程においては、すみやかな資金供与が行なわれたこと、なかんずく、多くの修復家たちによる組織的な作業が可能であったことが、きわめて重要な意味をもった。本年報に他の美術館の事業内容に関する記事を掲載することは例外的ではあるが、わが国でも阪神大震災以来、緊急事態を想定した美術館および関連諸機関の対応の問題がきわめて現実的な課題として認識されている現状をふまえ、ひとつの事例として紹介することも意義があると考えた。この趣旨をご理解下さり、掲載を快諾して下さいました講演者のチェッキ氏、およびイタリア文化会館館長ジュゼッピーナ・チェルツィ氏に深く感謝いたします。
(越川倫明)

The following is a translation into Japanese of the lecture titled “La rinascita degli Uffizi” presented by Dr. Alessandro Cecchi, director

of the Department of Renaissance and Mannerist Painting, Galleria degli Uffizi, at the Istituto Italiano di Cultura, Tokyo on 15 March 1995. Dr. Cecchi’s presentation dwelt primarily on the restoration of the Uffizi and its collections after the terrorist bombing on 27 May 1993 which resulted in several deaths and considerable damage to works of art in the Uffizi. His talk was of particular interest to the audience, coming so soon after the disastrous earthquake in the Kobe-Osaka area and its posing of serious questions regarding emergency preparedness at museums and related institutions in Japan. I would like to express my deep gratitude to Dr. Cecchi and Prof. Giuseppina Cerulli Irelli, director of the Istituto Italiano di Cultura, for graciously permitting this publication of the translated text in light of these special circumstances.

(Michiaki Koshikawa)

あの、1993年5月27日の夜から、すでに2年近くかたとうとしている。この日、憎むべき犯行によって何人かの罪もない命が奪われ、ウフィツィ美術館の一部が破壊され、数多くの人々が負傷した。負傷者たちが受けた傷は、今もって回復していない。

あの晩私は、ウフィツィ美術館館長アンナマリア・ベトリオーリ・トー



fig.2 ウフィツィ宮殿、東側と南側のファサード

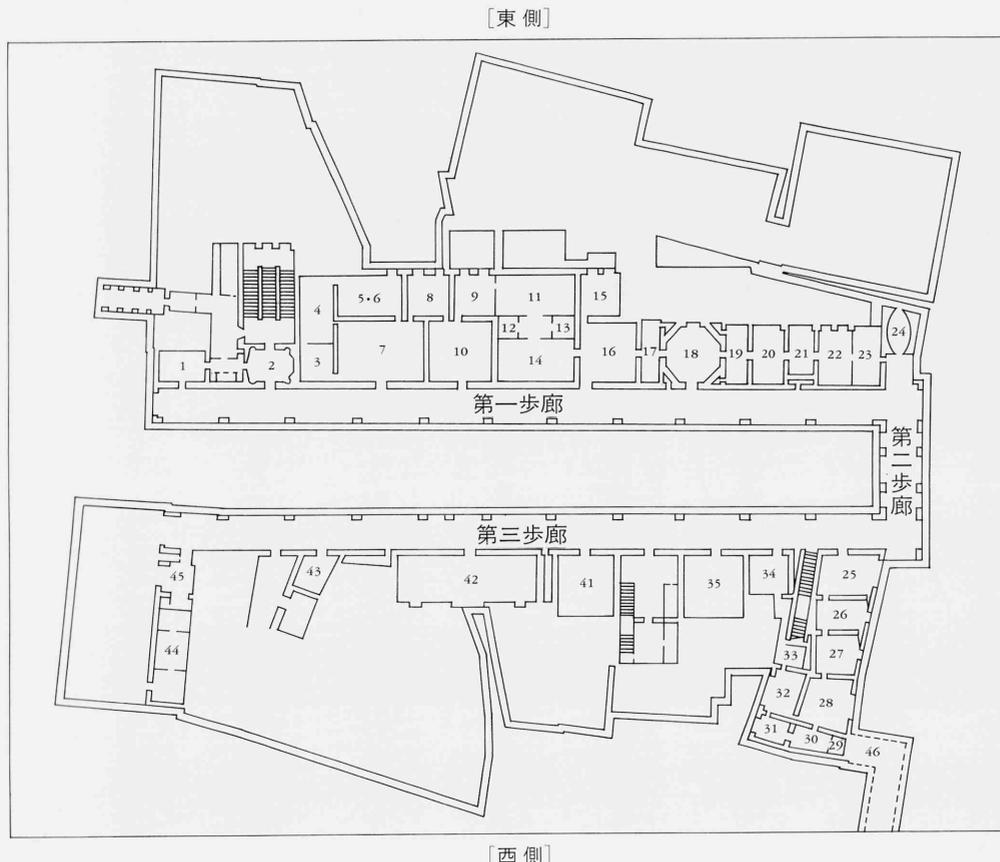


fig.1
ウフィツィ美術館平面図(かつての作品配置)：
(1) 古代彫刻；(2) 13世紀トスカナ絵画；(3) 14世紀シエナ絵画；(4) 14世紀フィレンツェ絵画；(5-6) ロレンツォ・モナコ、ジェンティレ・ダ・ファブリアーノ、ヤコポ・ベッリニ；(7-9) 15世紀フィレンツェ絵画；(10-11) ホッティチェリとフィリッポ・リッピ；(12) 北方絵画；(13-14) 15世紀末のフィレンツェ絵画とファン・デル・ワース；(15, 17) 15世紀末ウンブリア絵画とレオナルド；(16) レオナルド；(18) 「リアーナ」(古代彫刻、ボナロモ、ブロンズイーン)；(19) ベルジーノ、コスタ、フランチャ；(20) マンテーニャ、クラナハ、チューラー；(21) 15、16世紀ヴェネツィア絵画；(22) 16世紀ドイツ絵画；(23) レオナルド派と北方絵画；(24) ミニアチュール；(25) ラファエッロ、ミケランジェロ；(26-27) 16世紀イタリア絵画；(28) 16世紀ヴェネツィア絵画；(29-31) 16世紀エミリア絵画；(32) 16世紀ヴェネツィア絵画；(33) 16世紀末イタリア絵画；(34-35) 16世紀末ヴェネツィア絵画；(41) ルーベンスとヴァン・ダイク；(42) 17世紀イタリア、フランス絵画；(43-44) 収蔵室；(45) 喫茶室；(46) 「ウァザーリの通路」(17、18世紀イタリア絵画、自画像コレクション)

ファミからの連絡を受けて、同僚のアントニオ・ナターリ、カテリーナ・カネーヴァとともに美術館に駆けつけた。美術館に着くまでの間は、その直後に私の目前に現われたような悲惨な光景を目のあたりにしようとは、想像もつかなかった。また、同僚たちとともに、これほどの非常事態に立ち向かわなければならなくなるとは考えもおよばなかったのである。この初期の時点では、爆発の原因はガス漏れであろうと信じられていた。

美術館内部は、停電のため非常灯のわずかな光だけで照らされていた。館内に入った当初は、幸運なことに被害はごくわずかなように思われた。つまり、リチェット・ロレネーゼと呼ばれる部屋の窓ガラスが破壊されたのと、ジョットと13世紀の画家たちの展示室、およびリッビ親子の展示室の窓ガラスが破壊されたのにとどまったかと思われたのだった。第一歩廊の中の大きな窓は、爆風によってことごとく吹き飛ばされていた。

しかし第三步廊(fig.3)に着くや、私たちはすぐに被害の甚大さに気付くことになる。ヴァザーリの通廊に通ずる大きな扉によってたたきつけられた彫刻《円盤投げ》は、頭部と左腕が脱離するというひどい状態だった(fig.4)。

それから私たちは、通廊の階段を降りて、カラヴァッジェスキと17世紀絵画の部屋に向かった。そこからは、鼻をつく臭いの赤っぽい煙が上がって来ていた。懐中電灯と非常灯の薄暗い光を頼りに降りていく間、自分たちが割れて粉々になったガラスの上を歩いていることがわかった。よくよく見ると、その中には小さくばらばらになったカンヴァスの破片を見分けることができた。実際それらは、イタリア内外の画家たちによるバロック絵画の傑作の残骸だったのである！

fig.3 第三步廊内景
(事件以前)



fig.4 損傷した《円盤投げ》



階段の左手の壁には、フランドル画家ヘリット・ファン・ホントホルスト(イタリア名ゲラルド・デッレ・ノッテ)の《羊飼いの礼拝》(fig.5)がかかっていた。これは、修復不可能なまでに破壊されてしまった作品のひとつで、爆発で吹き飛んだガラスの破片によって絵画面がばらばらに粉碎されていた。同じくホントホルストの《幼児キリスト礼拝》(fig.6)も、数え切れないほどのガラス片で蜂の巣のようになっており、これらの破片は、いまだ傷ついたカンヴァス上に突き刺さっていた。

階段を降りきったところの広間(fig.7)では、窓と対面した壁の作品は、ことごとく破壊されていた(fig.8)。この壁には、やはりホントホルストの《女古い師》と《リュート奏者のいる夕食の情景》、重要なカラ

fig.5 ファン・ホントホルスト《羊飼いの礼拝》(損傷後表打ちを施した状態)



fig.6 無数の損傷を示すファン・ホントホルスト《幼児キリスト礼拝》



fig.7 ヴァザーリの通廊に通じる階段と展示された17世紀絵画(事件以前)



fig.8 著しく損傷した17世紀絵画(中央上段がマンフレディ《カード遊びをする人々》、中央下段がマンフレディ《合奏》)



ヴァッジェスキであるバルトロメオ・マンフレディの《合奏》と《カード遊びをする人々》が展示されていた。爆発の直撃を受けたこの壁では、ずたずたになったカンヴァスの残骸が、17世紀末の立派な額縁の中に残っているのみだった。これらの額縁自体もまた、多かれ少なかれ被害を受けていた。

その隣の部屋でも、展示された絵はガラス片によってさまざまな程度の被害を被っていた。この部屋の窓からは、廃墟と化したプルチ塔で、消防署員たちとミゼリコルディア修道院の修道士たちが、必死になってがれきを掘っているのが見えた。この塔はフィレンツェ農芸学会のオフィスになっていたのだが、彼らは守衛さんのご家族のうちひとつとして生存者がいないか、さがしていたのだった。この家族は、守衛をしている奥さん、そのご主人、ふたりの娘さんから成っていたが、努力もむなしく、彼らはこの事件の犠牲となって亡くなった。もうひとりの犠牲者は、アパートの火災で焼け死んだ学生さんだった。

死亡者がでたことに暗然となりながらも、私たちは建物の他の部分の検分を続けなければならなかった。とりあえず、夜警そのほか集まってきた人々には、そこいら中に散らばったカンヴァスの破片を踏みつけないよう注意をうながした。それは、あとで破片を集めて、破損した絵を修復することができるかもしれないからである。

時限爆弾(のちの検証で300キロの火薬が込められていたことが明らかになった)の爆発で特に被害の大きかった部分は、爆弾が仕掛けられていたジェオルゴフリ通りに面した諸展示室、つまりドッソ・ドッシの部屋、セバスティアーノ・デル・ピオンボの部屋、そして「16世紀の通廊」と通称される部屋(第33室)だった。これらの展示室でも窓はことごとく吹き飛んだが、多くの場合、暴行を防止するために少し前から設置されていた保護ガラスのおかげで、作品は奇跡的に無事だった。

唯一甚大な被害を受けたのが、セバスティアーノ・デル・ピオンボの《アドニスの死》(fig.9)である。この作品の場合、あまりにも画面が大きいため、保護ガラスが取り付けられていなかった。その結果、爆風で壊れた反対側の窓ガラスによって、画面上部が損傷することになったのである。

「ニオベの間」(fig.10)は、ヴィラ・メディチにあった有名な古代彫刻グループを展示するため18世紀に建築された部屋だが、ここも、爆破の被害をまぬかれなかった。《死にゆくニオベの娘》(fig.11)は、爆発で壊れた中央の大窓の枠に押しつぶされて、両脚がばらばらになってしまった。

事件の翌日と翌々日は、長い長い2日間だった。守衛、作業員、ピエトレ・ドゥーレ修復研究所の修復家たちがたくさん集まり、彼らの疲れを知らない献身的な助力を借りて、私たちは、被害にあった部屋から損傷した絵画をすべて運び出し、建物の東側の諸室に移動した(fig.12)。この作業が緊急に必要なだったのは、建物西側では、爆発の直撃を受けなかった部屋でさえも、爆風の影響で天窓が抜けてしまっていたからである。

この時以後、損傷した絵からは最も微細な剝落すらも起こらなくな

fig.9 損傷したセバスティアーノ・デル・ピオンボ《アドニスの死》



fig.10 ニオベの間内景(事件以前)



fig.11 損傷した《死にゆくニオベの娘》



fig.12 作品移動作業中の展示室



fig.13 爆風によって破れた天窓



った。修復家たちが、移動する前に、すべての作品に注意深く剥落防止の表打ちを施したからである(fig.5参照)。彼らはまた、最も被害の甚だしいヴァザーリの通廊から、修復時に使えるカンヴァスの断片を注意深く拾い集めた。

被害を受けた展示室や廊下からかかれきの除去が行なわれる一方、壊れた天窗(fig.13)には応急処置としてビニール・シートがかぶせられ、修理が開始された。また、ひどく損壊したブオンタレンティの階段の修繕も始められた。この作業は、建物から安全に出入りできるようにするために不可欠だった。修繕は、フィレンツェ建築文化財監督局と建築家アントニオ・ゴードリの指揮のもと、昼夜兼行の記録的なスピードで行なわれ、わずか20日間で完了した。

美術館は、東側部分だけが、6月20日には再び一般に公開された。一方、依然閉鎖された西側部分は、いわば大工事現場と化していた(この工事は、部分的には今も続いている)。いくつかの部屋は、一時的に作品の収蔵庫に転用された。

イタリア政府は、すみやかにフィレンツェ美術監督局とウフィツィ美術館のために高額の修復予算を与え、また、さまざまな機関・個人の方々から寄付金が寄せられた。こうした経済的援助のおかげで、1993年の夏から秋には、損傷した絵画の修復を開始することができた。損傷の程度はさまざまで、絵画147点、第三歩廊の彫刻49点におよぶ作品が、状態の改善を必要としていた。幸い私たちは、フィレンツェで活動する多くの高い技術をもったプライベート修復家たちの力をあてにすることができた。必要な設備・資材は美術館が購入し、美術館内の作業スペースで働く修復家たちに提供された。

事件から1年たたないうちに、美術館は「ミケランジェロとフィレンツェ画家の部屋」(第25室)を再び一般に公開することができた。展示方法も一新され、ミケランジェロの《トンド・ドーニ》には、新しい無反射保護ガラスがとりつけられた。ポルグリーニ家のために描かれたフランチェスコ・グラナッチの《ヨセフ伝》2点連作は、やっと修復を終えた大きい方の場面が、対をなすもう1点とともに、同じ壁面に展示できるようになった。また、フラ・バルトロメオの若描き《ポルツィア》——最近ワシントンのイタリア大使館から管理換えされた作品である——は、同じ画家の《聖ベルナルドゥスに現われる聖母》のわきに展示された。一方、もともとこの部屋に置かれていたマリオット・アルベルティネッリの《御訪問》は、現在修復の最終段階にかかっている。この作品は、修復初期の洗浄段階で、素晴らしい色彩が完全な状態で残っているたいへんな傑作であることが明らかになった。

この第25室と同時に、「ヴェロネーゼの部屋」(第34室)も新たな展示で公開された。一方、ラファエッロ、アンドレア・デル・サルト、ポントルモ、ロッソ・フィオレンティーノ、ティツィアーノ、セバステアノー・デル・ピオンボ、パルミジャーノ、ドツツ・ドッシ、ティントレットの作品が置かれる第26室から33室は、来年中に再び公開される予定である。一般に「16世紀の通廊」と呼ばれる第33室(fig.14)は、きわめて被害が甚大だった場所だが、現在フィレンツェ美術監督局、建築監督局によって新しい設計に基づく再建が進んでいる。ここでは、展示面積を拡大するとともに、新たな温湿度管理システムと照明シス

テムが備えられる予定になっている。

以上に触れた諸室では、作品の設置方法も一新され、よりフレキシブルに展示位置を選択できる掛け方が採用される予定だが、この方法は、いずれ可能な限り美術館全体に適用していくつもりである。すでにこの方法は、第35室(かつてバロッチとティントレットの部屋であったところ)に適用されており、この部屋は現在、爆破事件後に修復された作品の展示に使われている(fig.15)。ここでは、1994年5月27日から、19点の修復作品が展示されていた。この時の主な展示作品は、ロヒール・ファン・デル・ウェイデンの《十字架降下》、セバステアノー・デル・ピオンボの《アドニスの死》(画面上部に長い裂傷が入ったが、奇跡ともいえる修復によってほとんど見えなくなっている)、ドツツ・ドッシの《洗礼者ヨハネと福音書記者ヨハネに現われる聖母》(fig.16:修復によって鮮やかな色彩が回復された)、パルミジャーノの素晴らしい《男の肖像》、ホントホルストの3点の作品(これらはヴァザーリの通廊にあったもので、修復家の技術によって予想以上の回復を見せた)、エンボリの《静物画》、その他イタリア内外の重

fig.14 損傷した「16世紀の通廊」

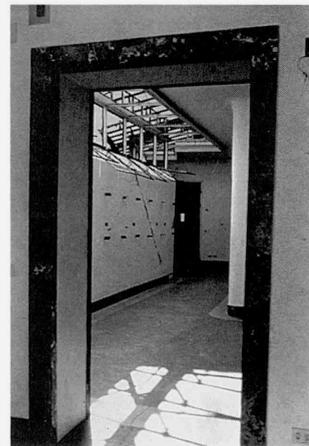


fig.15 第35室における修復作品の展示



fig.16 ドツツ・ドッシ《洗礼者ヨハネと福音書記者ヨハネに現われる聖母》(修復後)



要な17世紀絵画などだった。

最近この部屋の展示替えが行なわれ、新たな修復作品が公開された。たとえばクレモナ出身のカラヴァッジェスキであるバルトロメオ・マンフレディの2点の作品である。うち1点は《貢ぎの銭》で、fig.17は事件直後の状態、fig.18は損傷をめたなくした修復後の状態である。さらに、シエナの画家フランチェスコ・ルスティチの《ルクレツィアの死》は、やはりヴァザーリの通廊にあったもので、甚だしい損傷から奇跡的に回復した。ルーベンスの《ユディトとホロフェルネス》(fig.19)は、修復の過程で、過去において大幅にオーバーペイントされていたことが明らかになった。後世の加筆を取り去った修復後の状態は、まるでそれまでとは全く別の作品であるかのようである。最後に、エミリア派とフェララ派の作品、例えばパルミジャーノの素晴らしい《サン・ザッカリアの聖母》(fig.20:洗浄によってエナメルのような輝きをもつ色彩が現われた)、ドツ・ドッシの《傭兵隊長の肖像》(fig.21:分厚い汚れの層を除去した結果、見事な鎧の輝きが戻ってきた)、などが展示されている。

以上の作品、そしてまだ修復中のそれほど数多くない作品のほ

fig.17 損傷したバルトロメオ・マンフレディ《貢ぎの銭》



fig.18 バルトロメオ・マンフレディ《貢ぎの銭》(修復後)



fig.19 ルーベンス《ユディトとホロフェルネス》(修復後)



fig.20 パルミジャーノ《サン・ザッカリアの聖母》(修復後)



fig.21 ドツ・ドッシ《傭兵隊長の肖像》(修復後)

か、ルーベンスの2点の大作《イヴリーの戦い》(fig.22)と《アンリ4世のパリ入城》(fig.23)を忘れることはできない。これらは、現在、フォルテツァ・ダ・バツォ修復所に収容され、ピエトレ・ドーレ研究所のスタッフが修復に取り組んでいる。この修復は、当初から大きな困難が予想されていた。なぜなら、絵画層自体がかなり不安定な状態である上、カンヴァスのサイズがきわめて大きくしかも弱体化していたからである。現在のところ洗浄作業が終了し——洗浄によって画期的な結果がもたらされた——、また、2点のうち1点の裏打ち作業が完成した。今年の冬から来年春には、作品はウフィツィ美術館に帰ってくる予定である。

やはり現在も修復中なのが、フェデリーコ・パロッチの大作《民衆の聖母》である。この作品は、事件の際に置かれていた第35室の天窓のガラス片によって、多くの引っかき傷がつけられてしまった。修復によって、本来のパステル調の明るい色彩が取り戻されつつある。

その間、1994年11月28日からは、前述の彫刻《円盤投げ》が、修復されて第35室で公開された(fig.24)。この修復は、メリディアーナ航空のスポンサーシップによるものである。爆発でとんでしまった頭部と手は、継ぎ目がほとんど見えないように接合された。同時に、全体にむらのないように大理石の注意深い洗浄が行なわれ、以前には見られなかった美しさを示している。

以上、事件によって損傷した作品の修復の例を紹介してきたが、そのほかに、通常の修復計画やスポンサーシップに沿って行なわれている最近の修復の成果も付け加えておこう。例えば、1993年12月から公開されているチマブーエの《荘厳の聖母》がある。これは、同じ部屋に展示されている3点の13世紀の大作の中では、最後に修復されたものである。チマブーエの作品に先だって、1989年にはすでに、ドゥッチョの《ルツェライの聖母》とジョットの《オニツサンティの聖母》が、トスカーナ銀行のスポンサーシップによって修復を終え、一般に公開されている。

また、第9室にある2点の傑作も、イタリア内外の諸団体のスポンサーシップによって修復され、すでに公開されている。すなわち、アントニオ・デル・ポライウォーロとピエロ・デル・ポライウォーロ兄弟の《ポルトガル枢機卿祭壇画》(これは今でもオリジナルの飾り枠を保存し

fig.22 ルーベンス《イヴリーの戦い》(洗浄中の部分図)



fig.23 ルーベンス《アンリ4世のバリ入城》(洗浄中の部分図)



fig.24 《円盤投げ》(修復後)



ている15世紀後半フィレンツェ絵画の傑作である)、そしてピエロ・デル・ボライウォーロの《ガレアツォ・マリア・スフォルツァの肖像》である。一方、後期ゴシックの画家ロレンツォ・モナコの《マギの礼拝》は、アリタリア航空グループの旅行会社、イタリアツアーのスポンサーシップによって修復中で、驚くべき成果をあげつつある(figs.25, 26)。この修復は、ウフィツィ美術館が所蔵するモナコの2点の作品の修復計画の一環として行なわれている。もう1点の大きな《聖母戴冠》は、すでに何年か前からフォルテツァ・ダ・バツツ修復所にゆだねられており、本年中には修復が終了する予定になっている。

ヴァザーリの通廊の修復はほぼ終了しており、いずれ人的な手当が整い次第、ガイド付きの訪問鑑賞ができるようにしたいと考えている。一方、建物の一階の大きな部屋のひとつは、ベンヴェヌート・チェッリーニの大ブロンズ像《ヘルセウス》の修復のための作業所として使われている。この彫像は、何世紀間も外気と汚染にさらされ、し

かも近年加速度的にひどくなっている劣化現象のため、一刻の猶予も許されない状態にあったのである。

私たちは、「新しきウフィツィ美術館」を実現するために、いまだ多くの仕事を開始できる時期を待っている。1988年以降、フィレンツェ国立古文書館が他の場所に移転したことにより、いまはウフィツィの建物全体を美術館のために使うことができるようになった。すでに現在、「古きウフィツィ」をよりよい方向で改変するため、多くの大規模な計画が進行している。たとえば、美術館の第一歩廊では、全館閉館を避けるためいくつかの段階に分けて改造が行なわれており、照明システムの改善、後世の漆喰を取り除いて16世紀当時の壁面に戻すこと、18世紀の大理石の床の修復、絵画や古代彫刻の展示の改善などの計画が予定されている。また、100年近くの間、人の目にふれなかった41点の〈メディチ家の著名人士の肖像〉——この連作は、もともとウフィツィの歩廊を飾るために16世紀末に描かれたものである——が、同じ場所に再び展示されることになっている。

こうした作業が終了した時、ウフィツィの歩廊がどんなふうに見えるかといえば、第三歩廊の北側の端の部分を見てもらえれば想像できるだろう。ここでは、バッチョ・バンディネリの《ラオコーン群像》、ヘレニスム彫刻の《猪》、ローマ彫刻の《ヘラクレス》が、〈メディチ家の肖像〉の連作と一緒に展示されている。

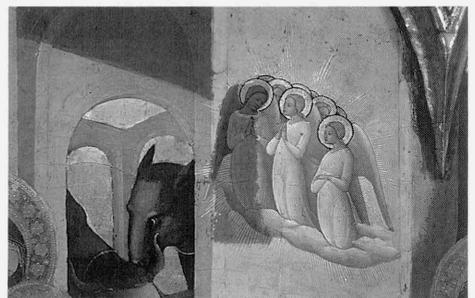
現在リッピ親子の部屋は、完全に閉鎖されている。内装の全面的改修の作業が進行中で、中央に大きな天窗、適切な人工照明、そしてより優れた温湿度管理システムが実現される予定になっている。しかし、作業の間この部屋に置かれていた有名作品がすべて見られないというのは、来館者の方々にとって不都合であるので、現在フィリッポ・リッピの有名な《聖母子》だけを、隣の第9室に一時的に移動して展示を行なっている。

最後に、有名なポッティチェッリの2点の大作、《春》と《ヴィーナスの

fig.25 ロレンツォ・モナコ《マギの礼拝》(洗浄の最終段階)



fig.26 ロレンツォ・モナコ《マギの礼拝》(洗浄の最終段階、部分図:左端の天使は未洗浄)



誕生》にふれておこう。これらは第10および14室に展示されているが、今年の夏までには、ミケランジェロの《トンド・ドーニ》と同じく、新しいドイツ製の保護ガラスをとりつける予定である。これまでの保護ガラスが暗く緑がかっていて鑑賞の妨げになっていたのに対し、新しいガラスは完全に透明で無反射のものとなるはずである。

確かに以上のような改修事業は、一時的に来館者の方々に不便を強いることになるが、私たちはそのような不都合を最小限に抑えるよう、できるかぎりの努力を行なっている。この一時的な不便は、将来、より機能的な新しいウフィツィ美術館の実現によって償われることだろう。そこでは、作品はよりよく照明され、近く展示室とヴァザーリの通廊に戻ってくる作品に加え、さらに数多くの作品が修復を終えて、かつてない色彩の輝きをもって展示されることだろう。こうして、美術館に加えられた非道な攻撃の痕跡は永久に消し去られ、さらにいえば、事件以前にもまして美しい場所としてよみがえるのである。過去400年以上の歴史を誇る世界最古の美術館は、伝統を保持しつつも自己改革を続けることが可能であることを示したいと思っている。その目的は、かつてヴァザーリが建設した建物の下に長い列をつくって訪れる来館者に、よりよい美術体験の環境を提供するためにほかならない。

(越川倫明訳)